

令和 5 年 5 月 30 日現在

機関番号：32686

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17H02710

研究課題名(和文) 言語的文化的に多様な子どもたちのパフォーマンスアートに媒介された学習活動の研究

研究課題名(英文) The research on learning through performance art for linguistically culturally diverse children

研究代表者

石黒 広昭 (Ishiguro, Hiroaki)

立教大学・文学部・教授

研究者番号：00232281

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,400,000円

研究成果の概要(和文)：海外にルーツがある言語的、文化的に多様性を持つ子ども達が希望を持ち、将来の発達につながる学習実践プログラムを開発することが本研究の目的である。本研究では演劇などのパフォーマンス・アートを取り入れることで自己表現活動を豊かにするための発達支援活動として、国内外の海外にルーツがある言語的文化的多様性をもつ日系の子どもに対する学習支援実践コミュニティと連携し、介入研究としてワークショップを実施した。また、関連する現場の理解やアートの理解を深めるための理論的検討会を組織し、検討した。さらに、オンラインでワークショップを実施するといった新しい研究手法を開発することもできた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

日本では言語的文化的に多様性をもつ子ども達に対する学習支援は依然学校が中心であり、方針もまだ十分定まっていない。北米を中心に行われている自己表現活動研究は個人の内的変化を問うが、本研究は個人だけでなく、仲間や指導者と共にある学習コミュニティをも視野に入れている点が新しい。さらに造形、演劇などのパフォーマンス・アートをを用いた自己表現活動を組織することに重点を置いた発達支援実践の構築と理論化は日本には類例がない。本研究では、自分を他者に向けて表現できることが生活適応や教科学習を支える基盤意識の形成に重要であると考え、新たな学習支援理論の構築を目指した。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to develop a learning practice program for linguistically and culturally diverse children with roots overseas that will give them hope and lead to their future development. As a developmental support activity to enrich self-expressive activities by incorporating performance arts such as theater, this study conducted workshops as an intervention study in collaboration with learning support practice communities for linguistically and culturally diverse Japanese children with overseas roots in Japan and overseas. In addition, a theoretical study group was organized and discussed to deepen understanding of the relevant field and art. In addition, we were able to develop new research methods, such as conducting workshops online.

研究分野：教育心理学

キーワード：移民 こども パフォーマンス・アート 学習 言語的多様性 文化的多様性 社会関係 アイデンティティ

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

日本においては移民の子ども達の学習権が十分保障されていないとの指摘は多い(宮島・太田,2005)。批判理論では、学習は知識獲得、社会関係の構築、アイデンティティの交渉の多層的な営みであるにとらえられてきた(Apple,1996)。他国にルーツをもつ子どもたちにとっては他者との十分な人間関係を作れないことや自らのアイデンティティの不安定さが結果的に教科学習を困難にすることが指摘されていた(Cummins, 2000)。したがって、そうした子ども達の学習課題を単に学習言語や第二言語の未習得、異なる文化的習慣の未習熟といった個体能力の不全とすることは適切ではない。申請者らは先行研究において日本国内、国外に在住する複数の日系人の子ども達の学習支援活動を調査してきた。その結果、(1)親の子どもに対する母語維持期待は高いもの子どもたちには必ずしもその動機が形成されるわけではない、(2)親が滞在国の言語を第一言語としない場合、その教科学習支援には困難がみられる、(3)さらには、教科学習に重点を置いた学習支援は学習動機が形成されていない子どもにとっては逆効果となりうる可能性がある、ことなどが明らかになっている(石黒, 2014)。他方、これらの子どもたちもパフォーマンス・アートを取り入れた自己表現活動には積極的に参加し、潜在的な能力の高さを示していた(石黒, 2015a; 2015b)。アイデンティティ形成とは、所作を含む広い意味での「自らのことば」を他者に対して作り上げていく社会的過程であり、支援においてはそうした社会的な対人活動を組織する必要がある。本研究では、これらの子ども達が抱える心理的不安定性をパフォーマンス・アートによる表現活動を通して克服することで、学習と発達の危機を乗り越える学習実践プログラムを社会文化的アプローチ(石黒,2006)に基づいて開発することを目指すこととした。

2. 研究の目的

学習は自己の将来に対する希望に支えられており、自己肯定感の高い子どもは自らの将来に期待し、それに向けた努力を惜しまない。しかし、経済、文化、人間関係の各種資本が乏しい家庭では自らを否定的に捉える子が少なくない。海外にルーツがある子どもたちなど、言語的文化的に多様性がある子どもたちの家庭環境はまさにそれに該当しがちである。こうした子ども達が希望を持ち、将来の発達につながる学習実践プログラムを開発するのが本研究の目的である。これまでの学習支援活動は学校の教科学習の補完を目指してきた。しかし、そうした支援が逆に学習動機を低下させ、学習からの逃避、さらには自らの発達への無関心を作り出してしまうことも少なくない。本研究では演劇などのパフォーマンス・アートを取り入れることで自己表現活動を豊かにし、発達支援を行う。

3. 研究の方法

日本国内外の海外にルーツがある言語的文化的多様性をもつ日系の子どもに対する学習支援実践コミュニティと連携し、それら実践コミュニティに対して形成実験研究(介入研究)を行う。既に研究協力を得られる組織が日本国内に3団体(群馬、岐阜、神戸)、海外には北米に2団体、タイに1団体ある。参与観察とその組織に所属する人々(こども、指導者、親)へのインタビューを通して各実践コミュニティの特徴を丁寧に把握しつつ、子どもたちの発達支援につながるパフォーマンス・アート・プログラムを開発し、支援実践の組換えを実践者と協働して行う。また、パフォーマンス・アートに基づいた自己表現活動と日本語や教科の学習、生活適応学習が有機的に結びつくような活動も模索する。

本研究の遂行にあたっては、以下のように研究領域を5つ置き、研究分担者がそれぞれ主として担当し、全体を研究代表者が統括した。

- 領域1：言語学習とパフォーマンス・アート（館岡洋子、日本語教育）
- 領域2：演劇を生かした教授法開発（渡辺貴裕、教授学）(川島裕子)
- 領域3：幼児期の遊びを中心としたパフォーマンス・アート（内田祥子、保育学）
- 領域4：児童、青年期のパフォーマンス・アート（石黒広昭）
- 領域5：学習コミュニティ構築、指導者育成とパフォーマンス・アート（宮崎隆志、成人教育）

この他に、研究協力者として、国内外の言語的文化的多様性を持つ子どもたちの所属する団体、それに海外のリテラシー学習研究者と国内のパフォーマンス・アート実践の専門家の協力を得た。

研究代表者である石黒は研究の全体を俯瞰し、各研究領域の進捗状況を管理することで、パフォーマンス・アートをを用いた学習活動と実践支援の理論化を目指す。領域1は日本語教師養成の

エキスパートの分担者が担当する。タイのバンコクの日系人コミュニティの子どもたちに対してワークショップを実施し、その分析を行う。領域2は、演劇教育の専門家である分担者が自ら実践する演劇ワークショップ実践と文献を通して演劇教育理論の検討を行う。領域3では、保育学の専門家である分担者がプレイショップと呼ばれる幼児の遊びプログラムを海外にルーツがある子どもたちが在籍する教育施設でパフォーマンス・アートに関わるワークショップを継続的に実施し、その過程と成果を分析する。領域4では、研究代表者が中心となって、日本国内の海外にルーツがある週末補習教育活動施設とカナダの継承語学校、アメリカの補習校で学習活動の調査や演劇ワークショップが実施される。領域5では、コミュニティビルディングの専門家である分担者が文献調査と言語的文化的多様性をもつ子どもたちを支援する実践者会議に参加し、その課題と対策を検討する。分担者は適宜研究会議を開催して、情報交換を行い、お互いの領域調査について相互に理解できるようにする。また、本科研の成果の社会還元のため代表者の大学のサーバー上にホームページを作成し、広く公開する。

4. 研究成果

研究開始から三年間(2017年度～2019年度)は国内外とも予定されていた現場調査が行われ、順調に進行していたが、2020年度、2021年度はコロナ禍の影響を受け、現場調査が難しくなったこともあり、調査計画を変えながら本研究の目的を果たすよう努力した。たとえば、2020年度には、「Art and Diverse Societies 研究会」を組織し、Socially Engaged Artsの実践研究者との交流を果たすことで、社会変革活動としてのアート活動について検討した。また、2021年度には、パフォーマンス・アートを生かすワークショップについての研究会と「国際移動児をめぐるトークセッション」が行われ、それぞれ本科学研究に関する理論的、実績的課題を確認する場となった。以下に年度毎の成果の概要を示す。

2017年度

科研プロジェクト全体として、2017年秋にスウェーデンから教育研究者と演劇の演出家を招き、国際シンポジウムと国際ワークショップを行った。日本国内からも教育研究者、教育実践者らを中心に多くの参加者があり、多様な個性を持った子どもたちの発達と学習をどのように促進するのが、パフォーマンス・アートと関連づけて議論された。この成果は本科研のホームページ上に掲載され、広く公開されている。また、多様性を促進するパフォーマンス・アート実践に対する調査もそれぞれの研究分担者、研究協力者によって行われた。国内では、北海道士別市あさひサンライズホールでの教師による演劇活動(「教師の力」)、岐阜県可児郡にある高校で行われた演劇ワークショップで参与観察が行われ、パフォーマンスアートの教育力が検討された。さらに、滋賀県彦根市では「吃音親子サマーキャンプ」が、群馬県伊勢崎市の日系ブラジル人学校では、「多文化プレイショップ」がそれぞれ研究分担者のアクションリサーチ型調査として実施された。さらに国外の日系の子どもたちに対する調査としては、カナダ・トロントの継承語学校、アメリカ・マサチューセッツの日本語補習校でそれぞれ参与観察とインタビューを中心とする調査が行われ、タイでは複数言語環境で育つ子どもについて言語実践セミナーが実施され、それぞれ分析された。

2018年度

本科研成果について報告し、外部有識者の意見を取り入れるため、日本教育心理学会でのシンポジウムをはじめとする複数の自主研究会を実施した。また、実践調査としては、研究協力関係にあるタイ・バンコクの母語・継承語学習組織が主催するワークショップに参加したり、日本人学校で日系の子どもたちの学習状況を調査したりした。さらに、日系の子どもたちのリテラシーや自己表現能力の発達に寄与する学習プログラムの試行調査として、研究協力関係にある日本とカナダの学習支援団体でワークショップ型の調査を行った。当該年度において特に重要なのは、関東北部にある南米にルーツを持つ日系の幼児施設において定期的に、遊びのワークショップである「多文化プレイショップ」を開催するようにしたことである。このワークショップは、言語的文化的に多様性を持つ幼児のためのプログラム開発だけでなく、将来就学前施設の教員になる学生たちに対して多文化状況に対する高い感受性を育てる活動にもなっていた。大学教育と地元のコミュニティサポートを連携させた地域貢献プログラムをカリフォルニア大学が長年実施してきたことは世界的に有名であるが、そこで開催された国際会議において本プロジェクトの成果と課題も報告され、フィードバックを受けることができた。本科研の成果の一部として、本科研の研究分担者、研究協力者が中心となって書かれた「街に出る劇場：社会的包摂活動としての演劇と教育」(新曜社)が出版された。

2019年度

地域コミュニティとの協働研究として、2018年度開始された群馬県にある、南米にルーツがある日系幼児施設において、遊びの放課後プログラム開発のための「多文化プレイショップ」を継続実施し、その成果を分析した。また、特に今年度は、プロの演出家、役者とともにドラマワークショップを実施し、そのプログラムデザインを検討することもできた。また、同じく、定期的にワークショップを実施してきた兵庫県の学習支援コミュニティにおいても演劇ワークショップを開催することができ、その課題を確認した。さらに、カナダ・トロントの、継承語学校の子

どもたちに紙芝居(paper drama)を作るワークショップが実施され、リテラシー学習に寄与するアートプログラムが検討された。タイ・バンコクでは複文化・複言語を生きる日系の子どもたちが自らのアイデンティティについて捉え直す機会となるワークショップが実践され、その成果が分析された。これらの成果は、日本教育心理学会、異文化間教育学会などの国内学会、および WERA (世界教育研究者学会)、EECERA (ヨーロッパ幼児教育学会)、ECER (ヨーロッパ教育研究者学会)、UCLiiks 国際学会など、複数の国際学会で報告され、それぞれ有意義なフィードバックを受けることができた。

2020 年度

日本国内の地域コミュニティとの協働研究では、日系の子どもたちの放課後学習施設と幼児教育施設における実践研究が予定されていたが、コロナ禍によりどちらも実施できなかった。それに代わってアートの社会的役割に関する理論的検討を行うため、本科研メンバーを中心に、日本における Socially Engaged Arts の拠点となる研究センターとともに「Art and Diverse Societies 研究会」を組織し、研究会を実施することができた。この場では、アートに基づいた社会活動を行っているアーティストにその実践を紹介してもらい、研究分担者だけでなく、関係するアーティストや教育関係者を交えて集中的な議論を行った。これによりアートを用いた社会変革活動の課題について検討することができた。同年には海外調査もコロナ禍により実施できなかったが、繰越研究として、2022 年度にトロントの継承語学校での調査が実施できた。ここでは、英語を第一言語、日本語を継承語とする日系カナダ人の子どもたちが、自分たちでシナリオを創作し、劇化するワークショップを対面で実施した。このワークショップでは、これまでの研究成果に基づいて、子どもたちが日常馴染んでいるコミックリテラシーを利用したものとされたため、難しい日本語の学習という学校的な課題として認知されることなく、遊び心を持って取り組める学習活動となった。

2021 年度

この年も日本国内の地域コミュニティとの協働研究として、日系の子どもたちの放課後学習施設と幼児教育施設における実践研究が予定されていたが、コロナ禍によりどちらも実施できなかった。しかし、その代わりに、さまざまな理論的検討がオンライン上で行われることになった。その一つは、こうした実践現場においてワークショップを実施するための理論と方法を学ぶ研究会であり、その道の専門家を招聘して計三回開催された。その内一回は、将来の現場実践者となる学生のためのファシリテーター養成研修として実施された。それぞれの研究分担者が知らない技法の紹介などもあり、有用な会となった。また、同じくオンラインで国外の日本語を学ぶ子どもたちを支援している団体関係者を招いた「国際移動児をめぐるトークセッション」も実施された。そこではタイ、ドイツ、日本の状況が議論され、その課題が確認されることとなった。海外調査もコロナ禍で対面では実施できなかったが、トロント(カナダ)とバンコク(タイ)の研究協力団体の協力を得てオンラインワークショップという新しい形態のパフォーマンス・アート・プログラムを開催することができた。両ワークショップでは、日系の子どもたちに対して連句を簡便にした「コトバ遊びワークショップ」が実施された。どちらのワークショップでもパフォーマンスとしての語りの意味が問い直される場となった。さらに、言語的文化的多様性を生きる子どもたちの学習活動において最も重要な課題である公正や権利の問題を討議するため、カナダの学習科学者を招いた国際セミナーを共催し、討議を行った。以上のように、コロナ禍により、対面による実践現場調査はできなかったが、オンラインを使うなどして、理論的な検討を深めることができた。また、対面の研究成果報告会を海外の関係する現場で実施することはできなかったが、科研のホームページに、日本語、英語に加え、南米系の人たちの第一言語であるポルトガル語も加えるなどして充実させた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 11件）

1. 著者名 深澤伸子・館岡洋子	4. 巻 30
2. 論文標題 実践の往還 タイの「複言語・複文化ワークショップ」実践から考える	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 早稲田日本語教育学	6. 最初と最後の頁 83-88
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鹿毛 雅治, 秋田 喜代美, 今井 むつみ, 楠見 孝, 遠藤 利彦, 石黒 広昭, 奈須 正裕, 小林 宏己	4. 巻 58
2. 論文標題 授業改善 心理学からの提言	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育心理学年報	6. 最初と最後の頁 274-283
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.5926/arepj.58.274	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 石黒広昭	4. 巻 63
2. 論文標題 アーティストは「アーティスト・イン・スクール」プログラムを通して学校を変えることができるのか	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 立教大学教育学科年報	6. 最初と最後の頁 83-108
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 館岡洋子	4. 巻 26
2. 論文標題 「日本語教師の専門性」を考える 「専門性の三位一体モデル」の提案と活用	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 早稲田日本語教育学	6. 最初と最後の頁 167-177
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 蓮見絵里・内田祥子・石黒広昭	4. 巻 2
2. 論文標題 言語的文化的に多様な子どもとの対話：音を使った即興演奏過程の微視的分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 思考と対話	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石黒広昭	4. 巻 62
2. 論文標題 障がいをもつ人々に対するアートに媒介された発達支援活動	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立教大学教育学科研究年報	6. 最初と最後の頁 85-98
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14992/00017615	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石黒広昭	4. 巻 62
2. 論文標題 「発達障害」という用語は何を意味するのか：発達障がいを抱える人々の医学的、教育的文脈における分類に関わる諸問題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 立教大学教育学科研究年報	6. 最初と最後の頁 69-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14992/00017614	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 川島裕子・中西紗織	4. 巻 69
2. 論文標題 教師の「声」に関する教育実践に向けて - 「演劇的手法によるコミュニケーション教育」による「声」の捉え直し	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 北海道教育大学紀要	6. 最初と最後の頁 269-276
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yuko Kawashima	4. 巻 13
2. 論文標題 Ethnicity as Rigid Boundaries and Muted Differences: Japanese Youth Experiences at School	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Educational Studies in Japan: International Yearbook	6. 最初と最後の頁 123-134
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮崎隆志	4. 巻 36
2. 論文標題 再媒介活動としてのアート: アーティスト・イン・スクールの可能性	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 社会教育研究	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石本 啓一郎, 石黒 広昭	4. 巻 65
2. 論文標題 媒介手段としての文字はどのように生まれるのか-インスクリプションに媒介された行為の発達	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育心理学研究	6. 最初と最後の頁 333 ~ 345
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5926/jjep.65.333	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 内田祥子	4. 巻 第14号第1号
2. 論文標題 スウェーデンにおけるナショナル・カリキュラムとの比較にみる新幼稚園教育要領の課題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 健康福祉研究	6. 最初と最後の頁 1 - 8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計36件（うち招待講演 8件 / うち国際学会 15件）

1. 発表者名 縣 拓充・西村 徳行・中野 優子・石黒 広昭
2. 発表標題 アートと学びの可能性を探る：その1 学校・大学における実践
3. 学会等名 日本認知科学会「芸術と情動」研究分科会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Sachiko Uchida
2. 発表標題 Early childhood education(ECE) teacher 's training program of ISESAKI MULTICULTURAL PLAYSHOP in Gunma, Japan
3. 学会等名 University-Community Links International Hybrid Conference（国際学会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 舘岡洋子
2. 発表標題 親と子どもの話を聞こう 複言語・複文化を生きる語り
3. 学会等名 タイにおける母語・継承語としての日本語教育研究会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Carol D Lee, Kris Gutierrez, Nai'lah Suad Nasir, Megan Bang, Miwa Takeuchi, Hiroaki Ishiguro
2. 発表標題 Diversity, Human Development and Opportunity to Learn: International Perspectives
3. 学会等名 World Educational Resarch Association, Tokyo, WERA, Tokyo, 6th.（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroaki Ishiguro
2. 発表標題 Play with Making Fantasy Stories to Recognize Self and Reconnect to Others for Linguistically Culturally Diverse Children.
3. 学会等名 ECER(European Educational Research Association), Hamburg (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石黒広昭・岡田 猛・小松佳代子・高木紀久子
2. 発表標題 アートと教育 日本における Arts -based educational research の展開
3. 学会等名 日本教育心理学会総会, 日本大学文理学部, 東京
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Hiroaki Ishiguro
2. 発表標題 Re-mediation of Everyday Literacy Assets through Making Fantasy Stories for Japanese Brazilian Children in Japan
3. 学会等名 University of Massachusetts at Amherst, USA (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石黒広昭
2. 発表標題 言語的文化的多様性を持つ子どもたちの発達支援にむけて：そのディスコースの検討とアートに基づいたリテラシー学習活動の紹介
3. 学会等名 東京学芸大学国際教育センター 「多文化共生Forum」 (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 深澤伸子・館岡洋子
2. 発表標題 第6回 複言語・複文化ワークショップ：親と子どもの話を聞こう 複言語・複文化を生きる7人の語り
3. 学会等名 JMHHERAT (「タイにおける母語・継承語としての日本語教育研究会」)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 館岡洋子
2. 発表標題 日本語教師の仕事を考える フィールドの経験の共有とその専門性について
3. 学会等名 国際交流基金日本語教育研究セミナー(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sachiko Uchida
2. 発表標題 Preschool Teacher 's Training of Children with Diverse Linguistic and Cultural Backgrounds: A Content Analysis of Student 's Reports in the Afterschool "Multicultural Playshop" Program.
3. 学会等名 EECERA (European Early Childhood Education Research Association) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sachiko Uchida, Eri Hasumi
2. 発表標題 ISESAKI MULTICULTURAL PLAYSHOP for Japanese-Brazilian preschoolers in Gunma, Japan
3. 学会等名 UC Links Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 内田祥子
2. 発表標題 多文化プレイショップにおける言語的文化的に多様な子どもたちとのブロックを介した遊びの微視的分析
3. 学会等名 日本心理学会第83回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内田祥子・蓮見絵里・石黒広昭
2. 発表標題 言語的文化的に多様な子どもたちの協働即興演奏の微視的分析
3. 学会等名 日本発達心理学会第61回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川島裕子
2. 発表標題 異文化間教育とダイバーシティ 理論と実践をつなぐ「演劇とダイバーシティ」
3. 学会等名 異文化間教育学会第40回大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 川島裕子・村田観弥・岸磨貴子・三宅貴久子・佐藤 郡衛
2. 発表標題 アートベース研究：学校における多様性を考える
3. 学会等名 異文化間教育学会第40回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuko Kawashima
2. 発表標題 Rigid Boundaries and Muted Differences: Japanese Youth 's Engagement with Ethnicity at School
3. 学会等名 World Education Research Association 2019: Focal Meeting in Tokyo (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sachiko Uchida, Eri Hasumi, Yuko Kawashima, Hiroaki Ishiguro
2. 発表標題 ANNUAL ACHIEVEMENT REPORT OF THE POWER OF DIVERSITY PROJECT: ARTS-BASED OUTREACH PROGRAMS FOR TRANSNATIONAL CHILDREN
3. 学会等名 UC Links Conference (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Hiroaki Ishiguro
2. 発表標題 The Power of Diversity Project: Arts-based outreach program for transnational children.
3. 学会等名 University-Community Links 2019 International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Sachiko Uchida, Eri Hasumi, Hiroaki Ishiguro
2. 発表標題 Multicultural Playshop: Play-based university-community collaboration for Japanese Brazilian preschoolers in Gunma, Japan.
3. 学会等名 University-Community Links 2019 International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内田祥子, 蓮見絵里, 石黒広昭
2. 発表標題 言語的文化に多様な子どもたちの協働即興演奏の微視的分析
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 内田祥子, 石黒広昭
2. 発表標題 幼児は過去のドラマ遊び体験をどのように描くのか(3)
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 蓮見絵里, 石黒広昭
2. 発表標題 ジャズ演奏者にとって「優れた即興演奏」とは何か
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鹿毛雅治, 秋田喜代美, 今井むつみ, 楠見孝, 遠藤利彦, 石黒広昭, 奈須正裕, 小林宏己
2. 発表標題 授業改善—心理学からの提言
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石黒広昭,岡田 猛,池内慈朗,小林由利子,内田祥子,眞壁宏幹,高木光太郎
2. 発表標題 アートは学校を変えるか
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 内田祥子, 石黒広昭
2. 発表標題 幼児は過去のドラマ遊び体験をどのように描くのか(2)
3. 学会等名 日本教育心理学会第60回総会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Hiroaki Ishiguro
2. 発表標題 What happens when kindergarten students draw together: Horizontal mutual appropriation among peers on learning cultural artifacts .
3. 学会等名 European Early Childhood Education Research Association (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yuko Kawashima
2. 発表標題 Toward a drama pedagogy to experiment affective relations: Educational practices in drama class at Japanese secondary school
3. 学会等名 International Drama In Education Research Institute (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮崎隆志
2. 発表標題 再媒介活動としてのアート
3. 学会等名 日本社会教育学会第65回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 舘岡洋子
2. 発表標題 マップを描き，マップで語るわたしたちの言語・文化体験
3. 学会等名 タイにおける母語・継承語としての日本語教育研究会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 内田祥子・石黒広昭
2. 発表標題 幼児はドラマ遊び体験をどのように描くのか
3. 学会等名 日本心理学会第81回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Hiroaki Ishiguro
2. 発表標題 The experience of drama play and drawing act: what do children narrate in their drawn picture after drama play?
3. 学会等名 European Early Childhood Education Research Association (EECERA), 26th Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 館岡洋子
2. 発表標題 「子どもを育てる、ことばを育てる 複言語環境で育つ子どもが自信を持って生きるための言語活動実践 」 「第 部 複言語・複文化活動報告 言語能力観の捉え直し 」
3. 学会等名 JMHERAT (タイにおける母語・継承語としての日本語教育研究会) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川島裕子
2. 発表標題 <教師>という「他者」になるパフォーマンスとその学びの内実;教員養成課程における演劇的手法によるコミュニケーション教育という文脈において
3. 学会等名 日本演劇学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川島裕子
2. 発表標題 教師教育におけるコミュニケーション教育のデザイン;「越境」の場としての演劇的手法による学びの特徴
3. 学会等名 日本教育学会第76回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 川島裕子
2. 発表標題 「学生 / 教師」という境界状態の身体的体験をめぐって;教員養成課程の学生による体験と教師教育における意義 -
3. 学会等名 日本教育社会学会第69回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 Kayoko Komatsu, Kikuko Takagi, Hiroaki Ishiguro, Takeshi Okada	4. 発行年 2022年
2. 出版社 Brill publisher	5. 総ページ数 294
3. 書名 Arts-Based Methods in Education Research in Japan	
1. 著者名 石黒広昭, 漢幸雄, 衛紀生, 坂崎裕二, 澤村潤, 森さゆり, 西川信廣, 林英樹, 深澤伸子, 館岡洋子, 常田景子, 本堂晴生, 渡辺貴裕, 川島裕子, 内田祥子, 宮崎隆志, 大島広子, 佐藤茂紀	4. 発行年 2018年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 232
3. 書名 街に出る劇場	
1. 著者名 Tatiana Chemi, Xiangyun Du, Aimee Durning, Chiaki Ishiguro, Dina Zoe Belluigi, Hiroaki Ishiguro, James Biddulph, Kimber Andrews, Krist Fenyvesi, Luke Rolls, Pamela Burnard, Rannveig Thorkelsd, Susanne Jasilek, Takeshi Okada, Tatjana Dragovic, Todd Elkin, Una MacGlone	4. 発行年 2018年
2. 出版社 River Publisher, Denmark	5. 総ページ数 316
3. 書名 Arts-Based Methods in Education Around the World (Ishiguro, H., Revisiting Japanese Multimodal Drama Performance as Child-Centred Performance Ethnography: Picture-Mediated Reflection on 'Kamishibai')	
1. 著者名 石黒広昭, 漆 崇博, 川島裕子, 白上昌子, 田野智子, 塚本浩子, 中西麻友, 樋口貞幸, 宮城潤, 宮崎隆志, 吉川由美	4. 発行年 2018年
2. 出版社 一般社団法人AISプランニング	5. 総ページ数 20
3. 書名 学校・子ども・アートの未来予想図を描く	

1. 著者名 松田武雄・上野 景三・宮崎 隆志・丹間 康仁・丹間 康仁・李 正連・肖蘭・河野 明日香・藤村 好美・松田 弥花・	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大学教育出版	5. 総ページ数 204
3. 書名 社会教育と福祉と地域づくりをつなぐ(宮崎隆志著 社会教育と福祉と地域づくりをつなぐ)	

1. 著者名 Tina Bruce, Monica Nilsson, Beth Ferholt, Pentti Hakkarainen, Milda Bredikyte, Elena Smirnova, Colwyn Trevarthen, Hiroaki Ishiguro, Marilyn Flear, et al.	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Taylor & Francis/Routledge	5. 総ページ数 422
3. 書名 The Routledge International Handbook of Early Childhood Play	

1. 著者名 川上郁雄・山下晋司・齋藤純一・石黒広昭・館岡洋子・イ・ヨンスク・蒲谷 宏・平高史也・小林ミナ・中川智子・人見美佳・河上加苗・田中祐輔・佐藤貴仁・齋藤 恵・池上摩希子・小宮千鶴子・いじょんみ・小島佳子・古屋憲章・他	4. 発行年 2017年
2. 出版社 くろしお出版	5. 総ページ数 264
3. 書名 公共日本語教育学：社会をつくる日本語教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

https://www2.rikkyo.ac.jp/web/pod/index.html

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	宮崎 隆志 (Miyazaki Takashi) (10190761)	北海道大学・教育学研究院・教授 (10101)	
研究分担者	館岡 洋子 (Takeoka Yoko) (10338759)	早稲田大学・国際学術院(日本語教育研究科)・教授 (32689)	
研究分担者	渡辺 貴裕 (Watanabe Takahiro) (50410444)	東京学芸大学・教育学研究科・准教授 (12604)	
研究分担者	内田 祥子 (Uchida Sachiko) (60461696)	高崎健康福祉大学・人間発達学部・准教授 (32305)	
研究分担者	川島 裕子 (Kawashima Yuko) (60824068)	大阪成蹊大学・教育学部・准教授 (34437)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計2件

国際研究集会 第7回立教大学教育研究国際セミナー	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 第6回立教大学教育研究国際セミナー：ポストモダンからみたスウェーデンの就学前教育における学習、遊び、アート	開催年 2017年～2017年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関